大鹿村中央構造線博物館たより 209号

2026年10月発行

TEL:(0265)39−2205
staff69@mtl-muse.com

大鹿村の山城⑤　駿木城

後醍醐天皇の皇子である宗良親王は、大鹿村に拠点を移した当初は、博物館たより207号で紹介した大河原城に居たものの、後に、より奥地にある御所平に移ることになったそうです。そして、駿木城は、御所平へ通じる道(図1)を監視するために築城されたと考えられています。城主は南朝方の忠臣・児島高徳の息子、児島高春と言われています。

駿木城は、大河原城と同じく、緑色岩の地すべりによってできた緩斜面の縁辺部に位置しています。南と西は、比高200mの塩川の断崖となっており、天然の要害です(図2・図3)。崖下の塩川近くからは、古くから塩水が湧いており、この塩水を守ることも駿木城の役割だった可能性がありそうです。

市村(1933)の調査報告によると、駿木城址周辺では、明治31年に墾起して水田への改変が行われたことや、第一郭の大部分が長年の塩川の侵食で崩落してしまったことなどから、当時の面影はほとんど残っていないとのことです。第一郭の東に、堀の跡と思われる凹地がわずかに残っていますが、地元の方は、この場所のことを「湯壺」と呼んでいたそうです。もしかしたら、ここで塩水を焚いて製塩をしていたのかもしれません。また、現在物見櫓が建てられている場所のすぐ隣が第二郭部分になりますが、地元の方は、この場所のことを馬場と呼んでいたそうです(図4)。(宮崎)

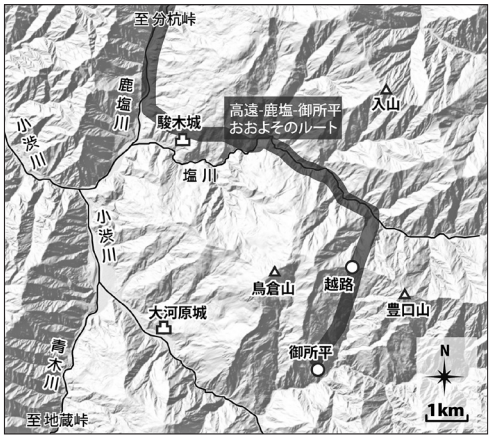


図1　諏訪・高遠方面から御所平までの道



図2　国道152号線木工館付近から駿木城方面を眺める

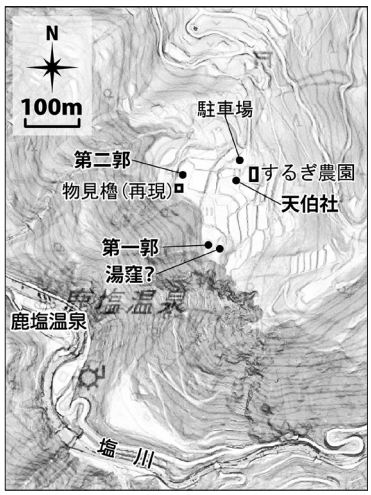


図3　駿木城の城郭とその周辺
QGISにて長野県砂防部の0.5m DEMをもとに傾斜量を算出した図を地理院地図と重ね合わせて背景に表示。色が濃いほど急傾斜で、色が薄いほど緩傾斜を示す。第一郭、第二郭、湯窪、天伯社の位置は、市村(1933)、宮坂(2013)を参考に記入。



図4　駿木城第二郭を東側から見る

◆参考文献
市村咸人(1933)史蹟名勝天然記念物調査報告 第拾四輯, 長野県, p.157-163.
宮坂武男(2013)「信濃の山城と館〈第6巻〉諏訪・下伊那編―縄張図・断面図・鳥瞰図で見る」, 戎光祥出版, p.453.
大鹿村誌編纂委員会(1984)「大鹿村誌 上巻」, p.95-97.